

「会報創刊号を読んで記憶をさかのぼる」 昭和 44 年卒 片野昭秀

創刊号の存在をすっかり忘れていました。びっくりです。しかし読み進むと思い出してきました。私は作成には殆ど関わっていません。にもかかわらず冒頭に名前を入れてくれたのはお二人の気遣いです。

西村さんと矢澤さんの投稿を覚えています。冒頭の「新しい生命」は丹野さん匂坂さん二人から相談された記憶があります。最後の「アプラクサス」は私が直前に何かで読んで提案したような気がします。

70年史作成にあたり昭和43年関東大会での対戦チームを調べたところ、出場した45年卒8人誰に聞いても神奈川代表としか分かりませんでした。やむを得ず（神奈川代表）と記載したのですが、横浜第一商業と判明しました。喉のつかえがとれた気分です。

丹野さんと匂坂さんの字体も昔のままです。（あたりまえか）

「会報創刊号を読んで」 昭和 44 年卒 匂坂芳典

懐かしい資料や片野さんの熱筆原稿も読ませていただきました。

丹野君が中心になって作った資料は、彼の関係の千葉のどこかで、夏休みに汗をかきながらお手伝いした記憶があります。

最近の記憶だけでなく昔の記憶も飛んでしまっていて、具体的なことは何も覚えていません。暑い夏の日の朧げな懐かしい印象だけです。

ただ、ヘッセのデーミアンから抜粋したアプラクサスについては丹野君のアイデアだった気がします。私も当時はヘッセの作品を読み耽っていた時期なので、朧げですが記憶があります。郷愁や車輪の下など心動かされた思い出はあるのですが、あらすじなどはもうすっかり忘れてしまっています。主人公のシンクレアとデーミアンの関係が、世間を知らない私と大人だった開成の友人の关系到重なって見えたことを覚えているだけです。過ぎ去った月日の長さを否応なく感じさせられています。

創刊号のほとんどは丹野君が作ったもので、私は印刷して、ただ言われるままに受け身の形でホチキス留めをただけだったように記憶しています。表紙に私の筆跡がありますが、書いた記憶はありません。丹野君の熱意だけが強く印象に残っています。